

# 大学オリジナルのレポート作成手引きの検討

## —東北大学における共通教材の開発を目指して—

菅谷奈津恵<sup>1)\*</sup>, 吉植庄栄<sup>2)</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構, 2) 東北大学附属図書館

### 1. はじめに

大学でライティング能力を育成する意義は広く認識されており、ライティングセンターを開設する大学も増えている（飯野・稲葉・大原 2015；吉田・Johnston・Cornwell 2010；岩崎・稲葉・小林・本村 2013）。授業においても、初年次教育から専門教育まで様々な段階でライティング指導の実践が報告されている（関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編 2013）。

最近では、大学オリジナルのレポート執筆の手引きも相次いで公開されている。その背景には、学生に基本的なライティング能力を習得させたいとの意図が看取できる。例えば、堀・坂尻（2015）では、学部初年次生がライティングの学習機会を増加できるよう、大阪大学で様々な整備を行ったことが報告されている。その整備の一環が、学生向けの小冊子『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』である。さらに、教員用の指導マニュアル『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』ライティング指導教員マニュアル』（以下『大阪大教員マニュアル』）や、授業での説明に使用できるパワーポイントも公開し、ライティングが専門でない教員もそれぞれの担当科目で指導を行えるよう工夫がされている。

大学のオリジナル教材は、個々の学生・教員を支援するだけでなく、組織全体としてライティング指導をどう進めるかという共通認識を形成する上でも有効であろう。こうした観点から、筆者らは今年度、「初年次のレポート作成とその指導を支援する共通教材の開

発」ワーキンググループ（以下、レポートWG）を立ち上げた。レポートWGでは、事業の一環として初年次生のレポート手引きを作成し、本学サイトにて公開することを目指している。

これまでの本学での取り組みに、本学附属図書館のスタッフを中心に作成した『「レポート力」アップのための情報探索入門』（以下『レポート力』）がある。ただし、これは半期の講義内容をまとめた資料のため、118ページと分量が多い。初年次生や教員が手軽に参照できるものとは言えず、情報の取捨選択が必要である。

では、本学のレポート執筆手引きに盛り込むべき情報は何であろうか。本稿では、初年次生に最優先で指導すべき項目を明らかにするために、先行事例を検討したいと考えた。以下では、まず、本学の『レポート力』作成の経緯を振り返り、その特徴について述べる。続いて、他大学によるレポート教材も含め、記載内容を分析する。最後に、まとめと今後の課題を述べる。

### 2. 『「レポート力」アップのための情報探索入門』

#### 2.1 前史：『東北大生のための情報探索の基礎知識』の刊行

ことの始まりは平成14（2002）年に遡る。この年の10月に『東北大生のための情報探索の基礎知識』（以下『基礎知識』）の作成が、本学附属図書館で開始された。当時の様子は次の通りである。

『基礎知識』作成の企画は、利用者教育担当の

\*) 連絡先：〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 sugaya@m.tohoku.ac.jp

発案から始まった。図書館の本館・分館で開催している情報探索講習会で利用するために、継続して使える冊子体資料を作成し、説明内容の標準化やレベルの統一、さらにはテキスト作成の負担軽減ができないかという発想であった（米澤・阪脇・高橋 2003：34）。

本館・4分館（筆者注 川内南キャンパスの附属図書館本館及び星陵キャンパスの医学分館、青葉山キャンパスの北青葉山分館（理学部、薬学部が奉仕対象）、工学分館、雨宮キャンパスの農学分館）の講習会などで利用できる、情報探索の冊子を作り上げるという目標をもって、全学の図書系職員による執筆を開始したのである。その活動の成果は、『東北大学生のための情報探索の基礎知識2003』（以下『基礎知識』という）の刊行というかたちで公表した（米澤 2006：193）。

以上にあるようにこの小冊子は、本学の図書系職員が講習会等で使用する共通テキストとして作成されたものである。具体的な執筆者は、情報企画係（当時）と拡大情報サービスワーキンググループ（本館・4分館・部局図書室のレファレンス・利用者サービス担当者の10名、若手中心）であった。

平成15（2003）年に2003年版が刊行され、その翌年、学内外からの反響等を考慮した上で、内容や体裁が改良された2004年版が、刊行された。この改良については以下の記録がある。

2003年版に不足していた「論文・レポートの書き方」に関する情報も、新たにとり入れることとした。（中略）内容についても単に「探索する」という視点のみで終わらせずに、「どのようなときに探索が必要か」という視点をおさえておく必要があると考えたのが発端であった。つまり、「論文・レポートを書くために」どのような過程でどのような探索が必要かという全体像を、明示しておく必要があると考えたのである（菅原・佐藤・米澤 2005：25）。

つまり2003年版では、図書館を中心とする情報探索

の内容に留まっていたが、2004年版からは、探索のゴールである「レポート・論文の作成」を目指した内容に成長したのである。

この2004年版は、「基本編」と位置づけられた。毎年、本学の新生全員への無償配布を行うため、毎年度の更新版の刊行が継続されるようになる。探索ツール情報の変更など、情報更新の必要性のほか、執筆者陣のさらに良くしようとする思いが毎年の版に反映されていった。この「基本編」は、平成22（2010）年度まで刊行と配布が継続される。

その後、「基本編」よりも専門分野に特化した「自然科学編」「人文社会編」が刊行された。また「基本編」の内容を抽出して翻訳した「英語版」も刊行され、この基礎知識シリーズは拡大していく。

「自然科学編」は、平成18（2006）年に丸善株式会社から刊行された『理・工・医・薬系学生のための学術情報探索マニュアル：電子ジャーナルから特許・会議録まで』（学術情報探索マニュアル編集委員会編）という冊子のベースとなっている。当冊子の反響も高く、平成28（2016）年1月現在、国内の大学図書館のうち404館で所蔵されている。一方、山崎（2006）のように、当冊子を評価しつつも作成者への助言を目指して内容面や編集面で批判的に評した書評も存在する。

当シリーズは、2004年版から「オープンソース」と位置づけられ、原稿である Word ファイルが、附属図書館のウェブサイトから公開されている。この背景としては、

同じような内容のマニュアルを、各大学で重複して作成する手間を少しでも省けることができれば、図書館界全体の情報リテラシー教育の向上に繋がるであろう。私たちとしても、努力して作成したものが多くの図書館や利用者に使ってもらえれば、非常に嬉しい限りである（菅原他 2005：27）。

という思いがあった。この公開は、「東北大学が教材をオープンソースとして学外にも提供したことは、他の図書館への波及効果をもたらした」（茂出木2014：54）とあるように、他の大学図書館の冊子や講習会テ

キスト・付随資料作成に大きな影響と助力を与えた。

この基礎知識シリーズは、このような学内外の大きな評価を受けた結果、平成17（2005）年度には、東北大学総長教育賞及び第40回国立大学図書館協会賞を受賞した。特に後者は、『基礎知識』作成とウェブ公開を評価するのみにとどまらず、当冊子を教材とした職員向け講習会の開催及び全学教育科目の実施についても評価を与えている。

## 2.2 『基礎知識』の終焉と考察

平成22（2010）年度をもって冊子体の『基礎知識』は刊行が終了された。附属図書館の印刷経費を圧迫したのが大きな要因であるが、その他の理由もあった。特に大きいのが、新入生への無償配布の費用対効果である。

最後の冊子体となった2010年版基本編は、211ページにわたる内容であった。これだけの分量と内容では、新入生にはレベルが高く、ほとんど読まれていない、という事が徐々に判明して行った。このことも刊行中止に繋がった理由の一つと見なしてよい。

『基礎知識』シリーズは、情報リテラシー教育に関わる図書館職員や教員等には大きな評価を得た。それはレポート作成をゴールとする一貫したポリシーの下に、幅広い専門的内容を体系的に整理して執筆されていたこと、全学的な図書館職員の協力体制の下に執筆に当たったこと、そしてオープンソース化等、様々な点で先例が無い画期的な取り組みであったからである（国立大学図書館協議会 2005）。『基礎知識』の更新業務には、新人や若手が主に携わったので、自然と図書館が扱う主題知識やデータベースなどのツール類の知識が深まり、専門性向上のための研修につながるという副次的な効果もあった。

しかし以上のように情報リテラシー教育に関わる図書館職員や教員等にとって役立つ内容を持つ反面、学生、特に初年次学生にとって詳細で理解し難い内容であったことは否めない。通読性にも配慮されていたにも関わらず、刊行されている当時『基礎知識』を通読したという学生に、筆者は会うことができなかった。

『基礎知識』構想時の作成方針は、次の通りである。

（1）対象者は主に東北大学の1、2年生および情

報探索レベルが初級レベルの学生と想定する。

（2）携帯性・通読性に優れた冊子体を発行し、さらにウェブ版を作成する（米澤他 2003：35）。

このように『基礎知識』は、初年次の大学生を対象としていたことは明らかである。しかし講習会用及び職員向けマニュアルという別の性格があったことも、当報告から分かる。この『基礎知識』を使った職員向け講習会を当時実施していたことが、記録に残されている。また「当初は講習会用の教材」と想定されていたものが「自習用」としての教材となった（米澤他 2003：36）とあるが、これはつまり、内容が深化した結果、読み物的なものに拡大していったと取れる。以上の背景から内容が、ボリュームあるものに進化していったと考えられる。

その結果、皮肉なことにタイトルに反して、実際の本学学生の「ため」になっていなかった、ということに至ったのではないだろうか。

また長く刊行を継続するうちに、この「基本編」の更新作業自体が自己目的化してきてしまったことも要因の一つに挙げられる。毎年の定例業務として定着した後は、入職数年目の新人の研修の場としての目的が無意識的に重視されて、毎年刊行することが主目標にすり替わっていった。

以上が、冊子体刊行中止に至る、『基礎知識』の功績及び問題についての考察である。

## 2.3 オンライン版での継続：『「レポート力」アップのための情報探索入門』へ

『基礎知識』の冊子体刊行中止後、現在の『レポート力』の作成・公表が、その役割を継承している。当初『基礎知識』が、「図書館や大学教育の現場でソースを共有して欲しい」という思いでウェブ上に公開されてきたのであるが、この思いが現在も継続しているのである。

『基礎知識』の刊行終了後、公開されているのは、附属図書館の全学教育科目で使ったテキストを再編したものである。もともと当科目は、『基礎知識』をテキストにして開講した科目であることもあり、『基礎知識』の刊行が終了した今、このテキストの公開をもつ

て冊子体の刊行に代えている。

『基礎知識』刊行終了後の平成23(2011)年の『レポート力』の「はじめに」には、

本学の全学教育科目で1年生向けに開講している「『レポート力』アップのための情報探索入門」の授業の一部で配付した資料に若干の修正を加えたもので、既刊『東北大学生のための情報探索の基礎知識 基本編 2010』よりもさらに基本的な事柄をコンパクトにまとめた内容となっています(東北大学附属図書館 図書館情報教育支援WG 2011)。

とあり、『基礎知識』のエッセンスをまとめたという編集方針が分かる。

なお当科目は平成16(2004)年度から開講されており、現在も継続している。12年間のうち科目名の変更が何回かあった。当科目の詳しい内容と経緯は、吉植(2016)に掲載予定なので、そちらを参考にされたい。

## 2.4 『「レポート力」アップのための情報探索入門』の特徴

前節で紹介したように『レポート力』は、附属図書館で開講している全学教育科目のテキストを編集した内容であるため、当科目の内容に大きく依拠している。当科目の内容は、「レポート・論文作成の手法」と「図書館での情報探索」の両方であり、『レポート力』は、他のレポート関係図書や教材と比較すると、文献探索の要素に大きい紙幅を割いていることが分かる。また授業や講習会での利用を念頭に置いているテキストであるため、各章の末には実習問題が付与されている。

具体的な内容は、平成26(2014)年度版を例に挙げると次の通りである。

- 1章 基礎知識の入手：辞典・Webの活用
- 2章 テーマの具体化：図書検索
- 3章 更なる素材集め(1)：雑誌検索
- 4章 更なる素材集め(2)：新聞・統計検索
- 5章 レポートの着眼点
- 6章 アウトライン・文章表現

## 7章 引用・参考文献の手法

## 8章 提出前の見直し(チェックリスト)

以上の1章から4章までが図書館職員の専門である文献探索の内容、5章から8章までが図書館職員がレポート・論文の書き方などを自学自習してまとめた内容である。このレポート・論文の個所は、特に当科目の講義を分担している本学生命科学研究科酒井聡樹氏による『これからレポート・卒論を書く若者のために』(酒井 2007)を参考にして執筆されている。

前半部分であるが、レポート・論文を執筆するというゴールを意識しながら、各種ツールの使い方を学ぶというスタンスで書かれており、その点は『基礎知識』時代からの継承点である。この点について、2章の図書検索を一例として挙げる。

図書館の講習会では通常、図書検索のやり方をOPAC等の使い方や、特徴、注意点などを教えるのに留まる。しかしこの2章は、レポート・論文執筆時のテーマ検討を主題にしており、図書検索を目的にしている。ここでは、テーマに関する検索キーワードを上位・下位概念で展開し、様々な角度から検討すること等が述べられるほか、実際の図書の探し方においても、OPACの検索はもちろん、実際に書棚で文献を探す、いわゆるブラウジングについても述べられている。

以上簡単に特徴を述べたが、前半部分は図書館に関連する情報探索を、実際の研究の流れに位置付けて説明するという、他の類書・類例と比較しても稀有な例であるため、その特性を活かすことは検討に値すると考えられる。しかし、この前半部分のみで70ページを数え、この分量は、初年次生にとって現実的ではない。『基礎知識』『レポート力』の蓄積を今後継承し、特性を活かすためには、当該部分を縮約化する必要がある。一方後半は、図書館員の独力ではなく、学内教員との協働で内容を検討し、作成すべきと考える。

またこの両要素を一冊にまとめず、分冊化することで、規模が大きくなることを避ける、という手段も挙げておく。これは前半と後半の性格の違いにも起因する。後半部分は一度作成すれば、更新頻度がそれほど高いとは考えられない。しかし前半部分は、ウェブ上のツールを中心に日々発展するため、短いスパンでの

定期的な更新が必要となる。この事情に対応するためには、分冊化等の工夫の必要がある。

なおこの『レポート力』は平成28年1月現在、平成26(2014)年度版をもって更新を停止し、今後、新しい形でのウェブ教材提供を検討する予定である。

### 3. 各大学のレポート作成手引きの分析

#### 3.1 選択基準と分析の観点

本章では、他大学で作成された手引きも含めて、記載された内容を検討する。本稿で取り上げるレポート作成の手引きは、7大学の8点である。筆者らが作成を目指す手引きの参考とするため、2015年8月末までに入手できたものから以下の基準で選択した。

- (1) 大学の公式サイトで一般公開されている。
- (2) 各大学で全学的に作成されている。
- (3) 冊子形式で10頁以上である。

各手引きがどのような項目を扱っているかを比較するために、井下(2014)のレポート作成のステップを基に分析を行った。

井下(2014)では論証型のレポートについて、作成手順を5つのステップに分けて説明している。ステップ1は「論点を見出す」段階で、指定されたレポート課題に基づき、具体的なテーマ、論点を決める段階である。ステップ2の「調べる」では、参考文献を検索し、資料を読み込んで情報収集をする。ステップ3は「組み立てる」段階であり、序論・本論・結論という構成を踏まえてレポートのアウトラインを作成する。ステップ4の「執筆する」は、実際に文章を書き上げる段階である。ステップ5「点検する」では、書きあげたレポートの文章や書式、内容等が適切かどうかチェックを行う。これらのステップは一方向に進むわけではなく、何度も行ったり来たりしながら行われるものであるという。

さらに、井下は5つのステップの前の準備として、レポートのタイプを理解すること、実際のレポート例を見てイメージをつかむことを挙げている。

表1の左列に示すように、井下(2014)の準備段階に該当するものを0とし、「論点を見出す」「調べる」「組み立てる」「執筆する」「点検する」に当たる部分を1～5として分類を行った。これら以外のものを「その

表1 各大学のレポート作成手引き

	大学名 (本文のページ数)	東北大 (118頁)	大阪大 (32頁)	大阪府 立大 (26頁)	関西大		立教大 (24頁)	金沢大 (21頁)	広島大 (10頁)
					基礎篇 (40頁)	実用篇 (27頁)			
0 準備段階	A. レポート・アカデミックライティングの特徴	○	○	○	○	—	○	○	—
	B. レポートタイプの分類	—	—	—	—	—	○	—	—
	C. レポート見本	○	—	—	—	—	—	—	—
	D. レポートの作成プロセス	○	○	○	—	—	○	—	—
1 論点を見出す	E. 思考を整理する	○	○	○	—	—	○	—	—
2 調べる	F. 参考文献の探し方	○	○	○	○	○	○	—	—
	G. 資料の読み方のコツ	—	○	○	—	—	—	—	—
3 組み立てる	H. 序論・本論・結論に書くべき内容	○	○	○	○	—	○	—	—
	I. アウトラインの作成	○	○	○	○	—	○	○	—
4 執筆する	J. パラグラフライティング	○	○	○	○	—	○	—	—
	K. 表現・表記の注意点	○	○	○	○	—	○	○	—
	L. 書式の注意点	○	○	○	○	—	○	○	—
	M. 引用の表記法	○	○	○	○	—	○	○	○
	N. 剽窃への注意喚起	○	○	○	○	○	○	○	○
	O. 参考文献リストの書き方	○	○	○	○	—	○	○	○
5 点検する	P. 提出前のチェックリスト	○	○	○	—	—	○	—	—
その他	Q. 学内のライティング支援	—	○	—	—	○	—	—	—
	R. メールの書き方	—	—	—	—	○	○	—	—

他」とした。表中の○は当該項目に関する情報が3行以上記載されていることを、－は記載がないことを示す。

### 3.2 全体的特徴

まず、各手引きの全体的特徴を述べる。なお、本章で各校の手引きに言及する際は、「東北大」「大阪大」のように大学名を記す。

表1の本文ページ数を見ると、本学の『レポート力』を除けば、いずれも10ページから40ページとコンパクトなものであることがわかる。記載事項は各手引きで違いが見られる。

東北大、大阪大、大阪府立大、関西大、立教大の5校は、テーマの絞り方やアウトラインの作成など、執筆前の構想段階を含む幅広い内容を扱っていることがわかる。関西大では部分的な重複はあるものの、「基礎篇」「実用篇」と観点の異なる冊子を作成している1。前述のように、大阪大は表1の学生向けのものだけでなく、教員用の指導マニュアルも発行している。

一方、金沢大、広島大の手引きは、焦点が絞られたものである。金沢大は「レポートの基本的形式に関するガイド」という副題が示すように、表現や書式、引用の際の注意点を中心に解説されている。広島大の手引きは、剽窃防止等の研究倫理に特化した内容であり、頁数も10ページとなっている。剽窃に比べて記述量が少ないが、捏造・改ざんに関しても重大な不正行為であることが明記されている。

なお、文体やデザインの点で異色なのは立教大のものである。箇条書きや図を多用して、テーマごとに見開きページで完結するように構成されている。これ以外の大学のものは、基本的には文章で書かれている。立教大の手引きは、文章を読み慣れていない学生にもなじみやすいものだと考えられる。

### 3.3 各ステップの特徴

以下では、ステップ毎の記載内容を報告する。

#### 準備段階（0）

「A.レポート・アカデミックライティングの特徴」については、多くの手引きに言及があり、高校までに

作成した文章と大学で求められるアカデミックライティングとの違いを説明している。例えば、関西大（基礎編）では、「はじめに」で以下が述べられている。

みなさんが大学で作成する文章は、おもに授業で作成するレポートや論文などです。それは、読書感想文のように、単に自分の感じたことをそのまま綴ればよいというものではありません。アカデミックな文章を書くためには、しっかりとした調査を行い、問題をきちんと考察したうえで、自分の見解をわかりやすく表現しなければならないのです。

「B.レポートタイプの分類」を明示的に示しているのは、立教大のみである。立教大では、代表的なものとして、「1.自分で調べて考えて書くレポート」「2.整理・まとめ型のレポート」「3.ブックレポート」「4.実験・実習・フィールドワーク等で得たデータをまとめて考察するレポート」の4つを挙げている。

大学のレポートにも様々なものがあり、求められる内容も書き方も異なる。自身の経験や授業での話し合いを振り返らせる内省型レポートの場合には、客観的に論じることよりも、前掲の関西大（基礎編）で否定されている「自分の感じたことをそのまま綴」ることが求められるかもしれない。立教大の手引きのように、授業で課されたレポートがどのタイプにあたるかを学生に意識させることは重要だと思われる。

「C.レポート見本」を掲載しているのは、東北大である。初めてレポートを書く学生にとっては、具体的な見本は、課題で何が求められているかを理解する助けになるはずだ。しかし、東北大が特定の授業の教材であるのに対し、各大学では全学レベルでの使用を想定したものと思われる。専門分野による慣習の違いや、講義ごとのレポート課題のねらい等の違いを考えると、単一の例を掲載するのは現実的ではない。タイプの異なる複数のレポート見本を掲載するのも、紙幅の制約から見て困難であろう。

「D.レポートの作成プロセス」は、4校の手引きに記載されている。大阪大、大阪市立大では、まず、アカデミックライティングの手順を列挙した上で、各項

目について解説をする形式となっている。東北大、立教大の手引では、図を用いて手順を示している。大阪大指導教員マニュアルでは、学生をつまづきやすい点の一つとして、レポート作成の手順を理解していないことを挙げている。レポート作成経験のない初年次生は、下準備もなく「いきなり執筆しよう」とする可能性がある（『大阪大教員マニュアル』：3）。また、テーマの絞り込みやアウトラインの作成、推敲といった手順は、レポート以外の文章を書く際にも適用可能なものである。ライティングのプロセスを明示することは、有益だと考えられる。

### ステップ1「論点を見出す」

レポート課題は「…について論じよ」のように抽象的な場合も多く、学生はより具体的なテーマに落とし込む必要がある。アイデアを得るための「E.思考を整理する」方法がいくつか提示されている。立教大では、課題に関連するキーワードを書き出したあと、その思考マップを作成する方法が紹介されている。実際に描かれたマップ例も掲載されており、手順がつかみやすい。大阪大では「セルフツッコミ」を提案している。これは、まず、課題を具体的な問いとそれに対する短い答えに分解し、自分で追加の質問（誰が、どうしてのような5W1Hのツッコミ）を考えて明確化していく方法であるという。

学生はそもそもレポート課題で「何を問われているのか分からない」（『大阪大教員マニュアル』：3）可能性がある。どのようにレポートのテーマを選択して論点を絞ればよいかという指導は、特にレポート作成初心者には重要だと思われる。

### ステップ2「調べる」

「F.参考文献の探し方」は、東北大から立教大までの5校で取り上げられている。関西大では、基礎篇で簡潔な説明を載せ、実用篇ではより多くのページを割いて解説している。本学の『レポート力』は、前述のように「調べる」にあたる情報が手厚く、書籍・雑誌・新聞等の各資料について検索の仕方や入手方法まで、詳細に記されている。手引きをコンパクトなものとするには、本学の初年次生に課されるレポートで、主に

どのような資料が使用されるのかを確認する必要がある。

一方、「G. 資料の読み方のコツ」に言及があるものは大阪大と大阪府立大だけである。大阪大で指摘しているように、探し当てた資料の全てに目を通そうとすると時間がかかりすぎてしまう。本を読む場合には、目次や索引から読み、必要な情報がどこに書いてあるかを推測することを、大阪大の手引は勧めている。また、読みを助けるために、用語説明のページがないかをチェックすることも推奨している。

参考文献を用いて書く場合には、「資料の読解・分析能力が文章作成能力以上に重要になってくる」（大島2014：142）という。剽窃の問題も、倫理観の欠如やライティング能力の不足だけでなく、読みの困難も関わっていると言われる（吉村 2013）。レポート指導には、読解の支援も組み込む必要があるのではないか。

### ステップ3「組み立てる」

「H. 序論・本論・結論に書くべき内容」も東北大から立教大までの5校で説明がされている。序論では通常「テーマの導入」「問題の設定」「結論と展開の予告」を書く（立教大：5）といった構成の知識があれば、どこに何を書けばよいのかわからない、指定字数が埋められないといった不安は軽減されるだろう。

レポート構成の知識を踏まえた上で、文章を書き出す前に「I.アウトラインの作成」を行う意義も述べられている。金沢大ではアウトラインという表現は用いていないが、全体の構成を考えることが重要であるとし、レポートに盛り込む項目を書き出して提示順を考える作業を行うことを勧めている。

井下（2014）は「全く構想もなく、下調べもしないで書き出すことは、羅針盤を持たずに、大海に出るのと同じこと」と述べている。ステップ2で収集した情報をどのようにレポートに配置すればよいのか、組立て方法を指導することは有用であろう。

### ステップ4「執筆する」

基本的な文章作成の留意点（J.パラグラフライティング、K.表現・表記の注意点、L.書式の注意点）については、多くの手引きで解説されている。特に、金沢

大は表現や書式等の形式面を中心とした手引きであり、丁寧体・常体の文体の使い分けやレポートに不適切なだけでなくた表現等、具体例を挙げて詳細に説明している。

引用に関連する項目（M.引用の表記法、N.剽窃への注意喚起、O.参考文献リストの書き方）は、ほぼ全ての冊子で記載がある。指導が必要な項目と認識されていることがわかる。剽窃が許されない行為であることも、全ての手引きで言及されていた。立教大では剽窃に関する注意喚起が、冊子中に3回繰り返し出てくる。大阪府立大は、参考資料としてレポートの表紙例を添付しているが、そこには、剽窃を行っていないことを学生自身が確認したことを示すチェック欄を設けている。広島大の手引きは、前述のように研究倫理の指導、特に剽窃防止に焦点を絞った内容であり、引用の仕方や著作権の説明が詳しく記されている。

#### ステップ5「点検する」

4校の手引きでは、学生自身が提出前にレポートを点検できるよう、「P.提出前のチェックリスト」を掲載している。このうち立教大は、各チェック項目（「序論で述べた問いに結論で答えていますか」「パラグラフの一文目目を下げて書いていますか」等）が、手引きのどのページで説明されているかまで記されており、親切な作りとなっている。

金沢大はチェックリストは付していないが、提出前の推敲が重要であることに言及している。文章例を挙げて、どのような点で改善が必要か、具体的な修正案も示しながら解説している。ただし、当該手引きが扱う内容が表現・表記面に限定されていることを反映し、修正すべきポイントも網羅されているわけではない。

#### その他

レポート作成の際に活用できる「Q.学内のライティング支援リソース」に言及したものもある。例えば、関西大（実用編）では、ライティングラボ（関西大学のライティングセンターの呼称）の利用可能時間や使用方法などが解説されている。本学においても、附属図書館での情報探索講習会や学習支援センターでのライティング支援が実施されている。こうした支援の有

効活用を促すことで、教員の指導負担の軽減や学生自身のレポート作成能力向上につながると考えられる。

関西大（実用編）、立教大では、「R.メールの書き方」についても、具体例を挙げて解説している。いずれもレポートに関する質問を教員に送るという設定である。関西大（実用編）には、メールの出し方のほかに教員のオフィスアワーを説明するページもある。教員がレポート作成支援のリソースの一つとしてとらえられていることがわかる。

以上、レポート作成ステップに沿って手引きの内容を報告した。なお、表の項目は全てを網羅したわけではなく、これ以外の情報を提供している場合もある。関西大（基礎篇）では、量的研究と質的研究の区別や調査方法のタイプ（実験、アンケート調査、文献調査等）についても簡潔に解説している。大阪大では、レポート作成に役立つWordの機能も紹介している。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、東北大学附属図書館で作成された『レポート力』作成の経緯を振り返った後、各大学のレポート手引きの特徴を分析した。

『レポート力』の前身である『基礎知識』は、もともと図書館の情報探索講習会等で使用するために、共通テキストとして作成されたものであった。説明内容の共有や資料作成の負担軽減を図るものという点で、筆者らレポートWGの教材作成の意図と通ずる。しかし、次第に内容が拡大した結果、最後の2010年版基本編は、211ページと大部の冊子となっている。初年次生が参照するものとしては難度の高いものとなってしまった。

『レポート力』は、レポート作成を目的とする情報探索とレポート・論文の書き方が盛り込まれている。表1に示したように、レポート作成の各事項が概ねカバーされていた。ただし、全学教育科目のテキストという性格上、各項目の情報量が多く、全体で118ページに及ぶものである。手軽に一読できる「小冊子」ではなかった。この『レポート力』の公開も2014年度版で停止され、今後の附属図書館からの教材提供のあり方が模索されている。『基礎知識』『レポート力』の発行と更新停止までの経緯は、内容や分量への留意等、

レポートWGで新たな教材を作成する際に参考とすべき点が多い。

各大学の手引きは、執筆前の構想から最終点検までのステップを含む幅広い内容を扱ったものと、表記・表現や引用等に焦点を絞ったものが見られた。学生が基本的なレポート作成能力を身につけることを目指すならば、前者のように全体的なプロセスの情報を含める必要がある。『大阪大教員マニュアル』が指摘するように、初年次生はライティングに必要な手順を理解していないため、何をどのように書きすすめればよいかわからない可能性があるからだ。

今後、本学のレポート手引きを具体化するにあたっては、東北大生の現状を把握することが必須である。全体的なプロセスを扱うといっても、コンパクトな冊子とするには、各項目でどの程度の情報量を含めるべきかを判断しなければならない。そのためにも、本学の学生がどこでつまづくのかを理解することが課題として挙げられる。授業で課されるレポートのタイプや、提出されたレポートの分析、学生・教員へのインタビュー調査等を実施し、指導が必要な点を明らかにしたいと考えている。

## 付記

本稿は、高度教養教育開発推進事業「初年次のレポート作成とその指導を支援する共通教材の開発」による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、貴重な助言を賜った秋田大学附属図書館の加藤信哉氏及び東北大学附属図書館情報サービス課長である村上康子氏に感謝する。

## 注

1. 関西大では、2015年9月に3冊目の手引きとなる『レポートの書き方ガイド（発展篇）』を発行している。発展篇には、より進んだ段階の情報として、要約の手順、発表資料（レジュメやスライド）の作成方法、レポートにふさわしい表現等が解説されている。また、論証型レポートの見本（表1のCにあたる）や、レポート作成プロセス（表1のDにあたる）を確認するチェックシートも付されている。だが、レポート見本やレポート作成プロセスは、発展篇というよりも基礎篇に適し

た内容だと思われる。

## 参考文献

- 飯野朋美・稲葉利江子・大原悦子（2015）「個別相談とライティング支援の可能性：津田塾大学ライティングセンターの活動分析から」『津田塾大学紀要』47, 133-148
- 井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』第2版，慶應義塾大学出版会
- 岩崎千晶・稲葉利江子・小林至道・本村康哲（2013）「ライティングセンターにおける相談記録の分析：学生からの相談事項に着目して」『大学ICT推進協議会年次大会論文集』[https://axies.jp/conf2013cd/paper/axies\\_1a-7.pdf](https://axies.jp/conf2013cd/paper/axies_1a-7.pdf)（参照2016-01-05）
- 大島弥生（2014）『『日本語リテラシー』育成のための授業設計のポイント』成田秀夫・大島弥生・中村博幸編『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』ひつじ書房，129-152
- 関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編（2013）『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房
- 国立大学図書館協会（2005）『平成17年度国立大学図書館協会賞審査結果報告』[http://www.janul.jp/j/operations/award/shinsa\\_17.pdf](http://www.janul.jp/j/operations/award/shinsa_17.pdf)（参照2016-01-05）
- 酒井聡樹（2007）『これからレポート・卒論を書く若者のために』共立出版
- 菅原透・佐藤初美・米澤誠（2005）「情報リテラシー・サービス 情報探索マニュアル作成を軸とした情報リテラシー教育の展開とオープンソースの試み」『医学図書館』52（1），25-30
- 堀一成・坂尻彰宏（2015）「大阪大学におけるアカデミック・ライティング教育の実践と教材作成」『大阪大学高等教育研究』3，27-32
- 茂出木理子（2014）「学習支援としての情報リテラシー教育：これまでとこれから」『大学図書館研究』100, 53-64
- 山崎茂明（2006）「書評・新刊紹介：理・工・医・薬系学生のための学術情報検索マニュアル 電子ジャーナルから特許・会議録まで」『情報の科学と技術』56（9），430
- 吉植庄栄（2016）「東北大学附属図書館が開講してきた情

報探索・アカデミックライティングの全学教育科目  
12年間のあゆみ：記録と展望』『東北大学附属図書館  
調査研究室年報』3, 43-53

吉田弘子・Johnston Scott・Cornwell Steve (2010)「大学  
ライティングセンターに関する考察：その役割と目  
的」『大阪経大論集』61 (3), 99-109

吉村富美子 (2013)『英文ライティングと引用の作法：盗  
用と言われないための英文指導』研究社

米澤誠 (2006)「ウェブ主流時代における情報リテラシー  
教育再構築の試み」『薬学図書館』51 (3), 193-197

米澤誠・阪脇孝子・高橋菜穂子 (2003)「情報探索マニ  
ュアルの作成と職員向け講習会の実施：東北大学附属  
図書館での事例報告」『大学図書館研究』69, 34-41

ト力」アップのための情報探索入門 2014』[http://  
tulibrary.tohoku.ac.jp/modules/supp/?cat\\_id=3](http://tulibrary.tohoku.ac.jp/modules/supp/?cat_id=3)

広島大学教育室・国際室「レポートの作成・提出に関す  
る手引き」検討WG (2015)『レポート作成上の注意』  
[https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/  
learning/undergraduate.html](https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/undergraduate.html)

立教大学大学教育開発・支援センター (2015)「Master of  
Writing」[https://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/  
philosophy/activis](https://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activis)

## 各大学のレポート作成手引き（五十音順）

大阪大学全学教育推進機構 (2015a)『阪大生のためのア  
カデミック・ライティング入門』第2版[http://www.  
celas.osaka-u.ac.jp/ourwork/academic\\_writing](http://www.celas.osaka-u.ac.jp/ourwork/academic_writing)

大阪大学全学教育推進機構 (2015b)『「阪大生のためのア  
カデミック・ライティング入門」ライティング指導  
教員マニュアル』第2版[http://www.celas.osaka-u.  
ac.jp/ourwork/academic\\_writing](http://www.celas.osaka-u.ac.jp/ourwork/academic_writing)

大阪府立大「アカデミック・ライティング入門編」編集  
委員会 (2015)『アカデミック・ライティング入門編：  
レポートの書き方』[http://www.osakafu-u.ac.jp/  
library/skillup/acw/](http://www.osakafu-u.ac.jp/library/skillup/acw/)

金沢大学共通教育機構 (2014)『レポート作成の手引き：  
レポートの基本的形式に関するガイド』[http://www.  
kanazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/01/  
tebiki2.pdf](http://www.kanazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/01/tebiki2.pdf)

関西大学教育推進部 (2014)『レポートの書き方ガイド (実  
用 篇 )』[http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/useful/  
index.html](http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/useful/index.html)

関西大学教育推進部 (2015)『レポートの書き方ガイド (基  
礎篇)』【改訂版】[http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/  
useful/index.html](http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/useful/index.html)

関西大学教育推進部 (2015)『レポートの書き方ガイ  
ド ( 発 展 篇 )』[http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/  
useful/index.html](http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/useful/index.html)

東北大学附属図書館・図書館情報教育支援WG『「レポー